台大日本語文研究第 17 期
2009 年 6 月，頁 15-28
2009 年「台灣大學日本語文學系演講系列」（2009 年 6 月 8 日）特別寄稿

從感謝表現看思維的變化

田島優*

摘要

日文中的感謝表現並不是一開始就以感謝表現爲前提成立，而是由某詞語與某種帶有否定意味的語素互相結合而成的合成語，抑或是轉用其語形所變化而來。以歷史角度來看其思維的變化歷程，可以查知以下的變化：＜自我感情的表現＞（カタジケナイ）→＜評價對方行爲＞（アリガタシ・リョガイナ）→＜體諒對方的表現＞（ミョウガナイ・モッタイナイ）。本來用於謝罪表現的「スミマセン」現在多用於感謝表現的情形，可以與＜體諒對方的表現＞的思維來做連結思考。

關鍵詞：感謝表現、合成語、思維的變化、體諒的表現、スミマセン

* 宮城學院女子大學日本文學科教授

Transition of Ideas in the Expressions of Gratitude

Tajima, Masaru*

Abstract

Expressions of gratitude in Japanese haven't originally appeared as literal expressions of gratitude. They have been formed as compounds of morphemes of negative meanings. The meaning of gratitude is a diversion from the original meaning of each compounds. Historically, the idea of the diversion appeared to have followed the transition: Utterance of one's feeling, e.g. *katajikenai* > Appreciation to the addressee's action, e.g. *arigatashi*, *ryogaina* > Consideration to the addressee, e.g. *myohganai*, *mottainai*. The fact that *sumimasen*, one of the expressions for apology, is often used to express gratitude has a connection with the idea of expressing consideration to the addressee.

Keywords: Expressions of gratitude, Compounds, Transition of ideas, Consideration to the addressee, Sumimasen

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Miyagi Gakuin Women's University

感謝表現から見た発想法の変化

田島優*

要旨

日本語の感謝表現は、最初から感謝表現として成立したものではない。ある語に否定的な意味を持つ形態素が結合してできた合成語である。また感謝の意味はその語形にとって転用されたものである。発想法について歴史的に見ていくと、＜自分の感情の表明＞（カタジケナイ）→＜相手の行為に対する評価＞（アリガタシ・リョガイナ）→＜相手に対する思いやり＞（ミョウガナイ・モッタイナイ）という変化があったことがわかる。謝罪表現であるスミマセンが現在感謝表現として多用されるのは＜相手に対する思いやり＞という発想法の上でつながるものである。

キーワード：感謝表現、合成語、発想法の変化、相手に対する思いやり、スミマセン。

* 宮城学院女子大学日本文学科教授

感謝表現から見た発想法の変化

田島優

一、はじめに

現代ではお礼を言う場合、アリガトウが一般的であり、謝罪表現であるスミマセンも最近多用されるようになっている。視野をさらに広げ、過去の文献を眺めてみると、その他にもカタジケナシやミョウガナイなど、様々な語形が見られる。また方言でも、キノドクナ、イヤナコッチャなど、現代の共通語的な発想で考えると奇妙に思える様々な表現が使用されている。

感謝表現は慣用化されているために、その表現のもともとの語源について考えることはほとんど行われない。しかし、感謝表現を時代的に並べていくと、感謝表現における時代的な発想法の変化が伺える。また、そこから謝罪表現であるスミマセンが現代使用されている背景や、奇妙に思われる方言についてもそれらの表現が生まれてきた背景を明らかにできるのである。

二、感謝表現について

（一）感謝表現の歴史

感謝表現は、他者からの行為に対しての挨拶表現である。感謝表現について歴史的に見ていくと、定型化した表現は下の身分の人から上の身分の人に対して用いられている。つまり感謝表現は、上の身分の人が下の身分の人に対し何かを行った場合の、下から上への礼の表現として確立したものと考えられる。

感謝表現を出現順に並べると次のようになろう。

カタジケナシ（忝なし）　平安時代頃から
アリガタシ　（有難し）　中世頃から
リョガイナ　（慮外な）　中世後期頃から
ミョウガナイ（冥加ない）　中世後期頃から

モッタイナイ（勿体ない） 近世初期頃から
スミマセン （済みません）明治時代から

最初は和語によるものであったが、中世の後期頃になると漢語をもとにしたものが出現する。明治時代頃からは本来は謝罪表現であるものを感謝表現としても利用していることがわかる。

（二）形態的特徴

上記の感謝表現を見ていくと、多くのものが単純語ではなさそうである。つまり複数の形態素によって形成されている合成語である。またその語構成の観点からいえば、「ナシ（無し）」「カタシ（難い）」「ガイ（外）」「ン（ん）」といった、打消や否定的な意味を持つ形態素が結合している。これらの点から、感謝表現は感謝の表現として最初から生み出されたものではないことになる。また合成語としてもその語の意味を転用することによって感謝表現として成立しているといえよう。

三、各表現の語源

（一）カタジケナシ

カタジケナシについてはその語源がはっきりしていない。岡田希雄氏は「新訳華厳経音義私記倭訓考」（『国語国文』11 巻 3 号 1941 年）において、「カタは貌にてナシは無シ。元来容貌の猥悪なるが故に恥ぢはばかる意味ともなり、さらに転」じたものではないかとする。この解釈が広く認められているようであり、『岩波古語辞典 補訂版』も語源を「容貌が醜い意から、人前でみっともない、恥ずかしい意。転じて、相手に失礼と思い恐縮する気持ちをいう」とする。顔を見せるのは失礼であることから、合わせる顔がないというような意味であるといえよう。

（二）アリガタシ

アリガタシは「有難し」という漢字表記からその語源は容易に解されよう。存在することが困難ということである。カタジケナシと同じように語源について『岩波古語辞典 補訂版』によると、「有る

ことを欲しても、なかなか困難で実際には少ない、無いの意。稀なことを喜び貴ぶ気持から、今日の「ありがたい」という感謝の意に移る」と説明されている。そこには感謝表現への意味の転用についても言及されており、ある現象が稀なことから感謝の意味に転じたとしている。

（三）リョガイナ

リョガイナは「慮外」すなわち「思慮の外」という意味で、思ってもみないこと、思いがけないことである。思いがけないことから、プラスの意味にもマイナスの意味にも使用される。感謝表現の場合はプラス的な意味であり、『日本語国語大辞典　第二版』が「思いがけないありがたいことの意から」とする。マイナス表現としては、思いもよらない不法・不当な行為についていう場合に用いる。日本語の歴史においては無礼な意味での方が先に出現している。

（四）ミョウガナイ

ミョウガナイとは漢字で表せば「冥加無い」となり、すなわち神仏の恵みがないことになる。発想法が理解できないと、この表現がなぜ感謝表現として使用されるのか不可解に思えるであろう。江戸時代初期には既に発想法が理解できなくなっており、ことばについて書かれた安原貞室の『かたこと』（1650 年）には次のように述べられている。

> 此ころかたつ田舎人の云るを聞侍れば、仮令尊貴の人の疎屋へ御入あるやうなおりふし、あるじかたの人の言葉に、扨も〳〵けふの御成は、冥加なひ御ことにてさふらふなどいふこと侍り。是以外の僻事（ひがごと）成べしと云へり。冥加に叶ひて侍るなどゝはいふべきこと也。

この文章の後で、貞室は何とか解釈しようと、「ない」を否定の意味ではなく、「はしたない」などの「ない」と同じく程度のはなはだしさを示す接尾語と見ようとする。現代の辞書類の説明によるところでは、複数の説が提出されていて、現在においても「冥加ない」の感謝表現としての発想法が理解できていないようである。た

とえば、『古語大辞典』(小学館　1993 年）の「冥加なし」の項には、

① 神仏の冥加を授からないさま。神仏から見放されるさま。

② (「無し」が否定の意味を失い、肯定の強調となって）この上なく冥加の恩恵をこうむるさま。身に余るほど幸せなさま。

と記述されている。その他の辞書などを参考として「ない」についての解釈をまとめると、次の三つの説にまとめられよう。

１、強調の接尾語説　『かたこと』

２、形容詞の「ない」から接尾語への変化　『古語大辞典』の「冥加なし」の項

３、形容動詞活用語尾の「なり」「なる」の転　『古語大辞典』の「ない」の項　金田一京助『国語音韻論』(1932 年）

１と３の解釈をとると、『古語大辞典』の「冥加なし」の項の①の説明、すなわち「冥加ない」の原義の意味の解釈ができなくなる。２の解釈では①から②への変化となる。

しかし中世末に刊行された『日葡辞書』(1603～04 年）には

Miŏga　ミャウガ（冥加）　よい運命。例、Miŏgamonai fito（冥加も無い人）不運な人、不仕合わせな人。¶Miŏgano tçuqita fito（冥加の尽きた人）同上。

この語は、時には、ある人が自分に相応した程度以上に、あるは、予期した以上に恩恵や厚誼を受けたのに対して、厚く感謝する場合にも用いられる。例、Miŏgamonai coto（冥加もないこと）

とあり、①と②との用法が同時期に併用されていることがわかる。もし辞書が記すように①と②の「ない」の意味が異なっていたなら、どちらの用法であるのか人々は混乱を起こすであろう。すなわち②の用法の「ない」も①と同様に否定の意味と見るべきであろう。

現代とは発想を変えて考えてみると、「冥加ない」、神仏の恵みがないのは行為を受ける私（発話者）ではなく行為を行った相手（聞き手）ということになる。これは次のモッタイナイについても、また方言で使用されるキノドクナやイヤナコッチャにも当てはまる。

これらは相手の気持ちを察したり、その気持ちを代弁しているのである。

なお近世には「冥加に尽く」「冥加が悪い」など感謝表現として「冥加」関係の語が使用されている。語源が理解出来ないながらも愛用されていた表現である。

（五）モッタイナイ

モッタイナイも漢字でかけば「勿体無い」となる。そのため、否定の「勿」と「無」との二重否定となり、『かたこと』などことばを扱う書物では常に問題となっていた。しかし「勿」は「物」の省画であることが近世中期頃には解明された。すなわち「勿体」とは「物体」のことである。そこで「勿体無い」とは、『かたこと』が述べるように、

> 正体なきといふべき時に、勿体なしといふは誤りたること葉なりと云り。勿体の二字を、体なしとよめば、勿体なしとはいらぬ重言かと云り。

「正体なし」のことであり、本来あるべき姿（状態）でないということになる。たとえば、捨てるのはまだモッタイナイというのは、捨てるのはこの物の本来あるべき姿ではないことになろう。

感謝表現としてのモッタイナイの使用は、ミョウガナイと同様に、相手の気持ちを思いやり、相手の気持ちを表しているのである。

（六）スミマセン

スミマセンは「澄みません・済みません」であり、自分の気持ちが晴れ晴れしない、あるいはまだそのことが終わっていないことであり、自分が納得していないという意味である。それが近世後期頃に謝罪表現として使用されるようになった。さらに明治時代以降は感謝表現としても利用され、現在では多用されている。ただし、現代でもスミマセンを感謝表現として使用することに違和感を覚え、お礼の時にスミマセンと言うと、「何もあなたに謝ってもらう必要はない」と気分を害する人もいる。

四、感謝表現の発想法

（一）発想法の確認方法

感謝表現は二、(一）で述べたように、古くは上の身分の人が下の身分の人に対し何かを行った場合の、下の人からの上の人への挨拶表現であった。それぞれの表現は、カタジケナキ御こと、アリガタキ御こと、ミョウガモナイ御ことのように用いられている場合が多い。

それぞれの表現の発想法を明らかにするためには、ある場面を想定しそれに当てはまるような文章を考えて、それぞれの原義をあてはめていくと、原義が感謝表現としてどのように転用されているのか理解できるであろう。

たとえば、次のような文を用いて考えてみる。

あなたが私のような者に対してそのようなことをして下さるなんて、(それぞれの原義）ことです。

（二）カタジケナシ

カタジケナシの原義は、合わせる顔がない（顔が見せられない）であった。この原義を当てはめると、

あなたが私のような者に対してそのようなことをして下さるなんて、合わせる顔がない・顔が見せられないことです。

となる。つまり、自分は恐縮していますというような、相手に対して自分の感情の表明を行うことによって感謝の意を表していることになろう。

（三）アリガタシ・リョガイナ

アリガタシとリョガイナとは同じ発想法に基づいているようである。アリガタシの原義はめったにない、あることがむずかしいである。一方のリョガイナは思いの外だ、思ってもみないことだという意味である。つまり、

あなたが私のような者に対しそのようなことをして下さるなんて、(私にとって）めったにない・思ってもみないことです。

となり、相手の行為に対する評価によって、感謝を述べているので

ある。

（四）ミョウガナイ・モッタイナイ

この両者も同じ発想法に基づいていると考えられる。ミョウガナイの原義は神仏の恵みがない、モッタイナイの原義は本来のあるべき姿でないという意味であった。

あなたが私のような者に対してそのようなことをして下さるなんて、神仏の恵みがない・本来のあるべき姿でないことです。

となり、相手に対する思いやりの表現になっている。

先の『かたこと』に見られたように、この発想法は京都では早くに忘れられたようである。ただし、北陸地方などの日本海側で使用されている方言の状況からはこの発想法がかなり広く取り入れられたことがわかる。

福井県・石川県・富山県で使用されているキノドクナ（気の毒な）、福井県のイヤナコッチャ（嫌なことだ）、青森県のメワグ（迷惑）は、この相手に対する思いやりという発想によるものと思われる。あなたにとってみれば、気の毒なこと、嫌なこと、迷惑なことというようになる。このような方言に見られる発想法については、夙に柳田国男が指摘している。

北陸地方から岐阜県、滋賀県などで物を貰つてウタテイだのオトマシイだのいふのは、それから又一歩を進めて、そんな必要も無いのに無益なことをなされるといふ、批評のやうな形を取つた言葉ですが、是も後には自分でも意味を知らずに使うやうになりました。是等は何れも自分より目上の人に対して、我が身をへりくだつていふ言葉であつたのが、後には対等どうし、又は時には低い地位の者にも之を使ふやうになつて、もとの感じが無くなりました。（『毎日の言葉』有難ウ　1946 年）

ウタテイもオトマシイも嫌だという意味であり、北陸地方に見られるイヤナコッチャなどと共通するものである。柳田は＜批評＞という表現を用いて説明している。

五、発想法の変化と謝罪表現のスミマセン

（一）発想法の変化

前節（四節）で見てきたように、日本語の感謝表現においては次のような発想法の変化が生じていた。

中古　　自分の感情の表明（カタジケナイ）
↓
中世　　相手の行為に対する評価（アリガタシ・リョガイナ）
↓
中世末　相手に対する思いやり（ミョウガナイ・モッタイナイ）
↓

ただし感謝表現は原義が転用して成立しているので、感謝表現かどうかの判断に困る場合がある。これは謝罪表現についても当てはまる。感謝表現なのかどうかを明らかにするためには、その語の使用されている状況を明確にした上で分析を行う必要がある。

（二）表現の使い分け

感謝表現は他の語とは異なり、新しい表現が生まれれば古い表現が消えてしまうわけではない。現在では一般的にはアリガトウ（アリガトウゴザイマス）が使用されているが、古くからのカタジケナイも、場合によってはモッタイナイも用いられているように、複数の表現が併用されている。ある場合には、一発話中に複数の表現が連続して出現し、感謝の念の強さを表明している場合もある。

下から上への挨拶表現であった感謝表現が、柳田の文章にも見られたように、ある時期から対等どうし、また上の者から下の者へも使用されるようになる。それまでの下から上への一方向性であった言語行動が、双方向の言語行動へと変化したのである。そのために、方向性による表現の使い分けを必要とするようになってくる。

近世後期において、江戸では下から上へは「ありがたい」が、上から下へは「かたじけない」が使用されていた。スミマセンもその

ような状況において出現してきたと思われる。スミマセンの出現について柳田国男は次のように述べている。

> アリガトウが幾分威張つたやうに聴こえ始めると、下から上に向つて礼をいふとき、殊に女たちは同輩の間にも、之を避けてよくスミマセンをいふやうになつた。(『毎日の言葉』スミマセン)

すなわち、上から下への場合にアリガトウが使用されるようになり、それに伴い下から上へはアリガトウの丁寧表現であるアリガトウゴザイマスが使用されていた状況において、新たな表現形式が求められた。そこで謝罪表現であるスミマセンが利用されるようになったものと考えられる。

(三)スミマセンと感謝表現の発想法との関係

謝罪表現のスミマセンがどうして感謝表現としても使用されるようになったのか。その原因を考えるためには、スミマセンが使用されるようになる前の感謝表現における発想法を考える必要があろう。中世後期頃からミョウガナイが出現し、近世になってモッタイナイも用いられるようになる。これらの表現の発想法は、相手に対する思いやりであった。一方、謝罪表現は相手に迷惑をかけているという意識に基づいている。

青森県の方言であるメワグ(迷惑)に見られるように、相手から自分への行為について、その行為は相手の手を煩わせている、迷惑をかけているという意識が生じている。この相手に対する思いやりという点で、感謝表現と謝罪表現であるスミマセンとは結びついているのである。感謝の言語行動の双方向性に伴い、特に下から上への表現においては、相手の気遣いを強く意識する表現が求められたのであろう。

スミマセンの定着により、ゴメンネ(ご免ね)やモーシワケ(申し訳ない)などといった様々な謝罪表現が、現在感謝表現として使用されている。

六、終わりに

北陸地方など日本海岸側に見られるキノドクナやイヤナコッチャといった他の地域には見られない感謝を表す方言や、謝罪表現であるスミマセンの感謝表現としての利用については、感謝表現の発想法の変化を辿ることにより明らかにできた。

方言形に見られる表現は、中世末頃から近世にかけて使用されていたミョウガナイと同じく相手に対する思いやりという発想によるものであった。また謝罪表現であるスミマセンが感謝表現としても活用されたのも、相手の手を煩わせている、相手に迷惑をかけているという意識、すなわち相手に対する思いやりに基づく発想法で結びついていることによる。

今後の課題はまだまだ多い。

- 発想法の変化がなぜ生じたのか。またなぜその時代に生じたのか。
- 感謝表現において、和語から漢語への動きが見られるのはなぜなのか。
- 感謝表現が、単一方向から双方向への言語行動に変化したのはなぜか。
- 発想法の変化や言語行動の変化と、社会生活の変化（階層社会から平等社会へ）との関連についての考察。

感謝表現の発想法の変化を明らかにするためには、このような多くの問題を解決しなければならない。

付記：

本稿は、中華民国 98 年（2009 年）6 月 8 日に「台湾大学日本学講演シリーズ」において同題で行った講演の内容に、当日の意見を参考にまとめ直したものである。なお感謝表現に関する以下の拙稿を参照していただければ幸いである。

（1992a）「冥加ない」考　『説林』40 号　愛知県立大学国文学会

（1992b）「勿体なし」・「勿体」考　『東海学園国語国文』39 号　東海学園女子大学国語国文学会

（2000）近世前期のことば問題―「漢語類＋ない」　『国語語彙史の研究』19　和泉書院
（2004）お礼表現史研究序説　『名古屋大学国語国文学』94 号
（2004）「冥利（冥加）に尽きる」考　『日本文学ノート』39 号　宮城学院女子大学日本文学会